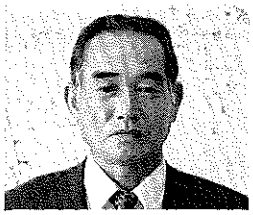
沖縄県立 博物館だより 1992.1 No.32

生涯学習の場として……

博物館の利用を



館長　大城宗清

明けましておめでとうございます

世はまさに生涯学習時代、週休２日制に伴う余暇の利用など、生涯学習を振興する社会教育施設としての博物館の果たす役割は大きなものがあります。

当館は、沖縄の歴史・考古、自然史、美術工芸、民俗をそれぞれのテーマで分かりやすく展示してあります。学校教育は勿論のこと、地域の子供会・老人会・婦人会などの学習の場にご利用いただければ幸いに存じます。今年度は、小学校で新学習指導要領が施行され、それにともなって新教育課程の編成が行なわれます。本県の教育目標であります「自ら学ぶ意欲」を育てるためにも、子どもの頃から楽しい学習の場として博物館に親しむ機会を設定して欲しいものです。今年も「親しまれる」「開かれた」博物館づくりをモットーに活動して行きたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

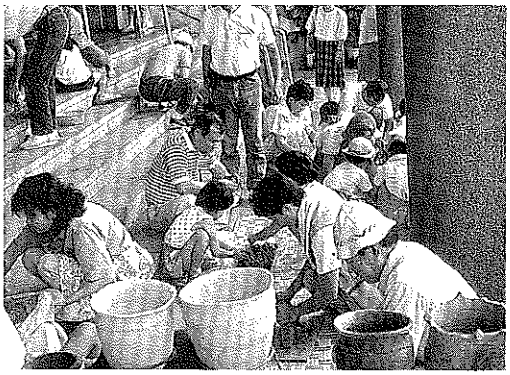
歩く
見る
作る

土と汗とまみれて

親子土器づくり

当館では、夏休みこども体験学習・歩く－親子文化財めぐり（91．7．27：台風接近で中止）、見る－映画を見よう・郷土の文化財を知る（91．8．11）、作る－親子土器づくり（91．8．25）が行なわれました。特に親子土器づくりは、親子が共同して土器づくりに挑戦することにより親子の絆を深め、あわせて郷土文化にふれる機会をつくる目的で行なわれました。定員10組対して14組・28名の親子が参加しました。まず、比嘉賀盛・宮里信勇（実験考古学研究者）さんの説明を受け、親子で素地づくり・成形と進められましたが土器の形づくりなど、結構難しく汗だくになりながら親子で土器づくりにがんばっていました。午前中の予定が午後３時半まで延びましたが、最後の仕上げ、野焼きまで体験することができたことは夏休みのいい思い出になったことでしょう。

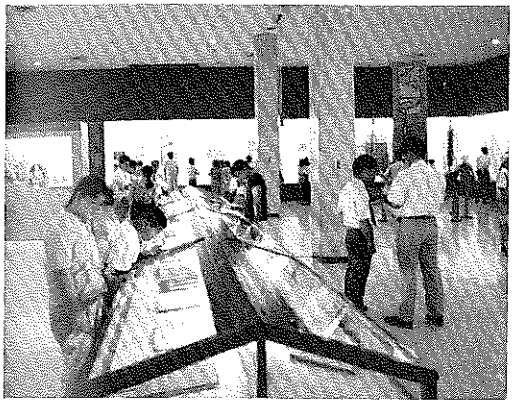
さて、そのできばえはどうだったでしょうか。……？。そのようすを写真で紹介します。



もう～ ハッスル！ 国頭地区小・中学校初任研

博物館学習を実践

新任の先生方に、先輩教師の教育実践などを研修していただき、教育現場での実践力を高める趣旨で実施された初任研も、91年度の高校への導入を最後に小中高完全実施に入った。当館でも、国頭教育事務所と協力して国頭地区小・中校の初任者研を実施し、今年で2年目を迎えました。91年度は8月15日、40名の先生方が一日、博物館で楽しく研修を行ないました。当館学芸員・萩尾による琉球史と首里城の歴史の講話のあと、沖縄の歴史・考古展示室で展示資料を見ながら沖縄の歴史について学習を深めました。午後は、自然史室、美術工芸室、民俗室の見学をしていただき4時に博物館を後に山原路に向かいました。

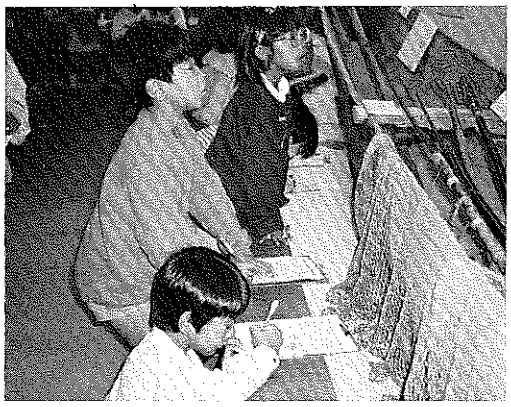


今後は、児童生徒とともに博物館での教育実践も期待したいものです。

博物館は発見の場・小さな目大きな目で探検しよう

課題を見つけ、探求する姿勢を育てよう！

91年8月1日～9月2日まで行なわれた企画展・沖縄のチョウ展には、夏休みとあって、連日親子連れで賑わいました。それは、チョウの可憐さ、美しさが人々の心を引きつけたことは言うまでもないが夏休みの自由研究のネタ探しにもおおいに役たったらしい。親にとって夏休みの自由研究は、何をどのようにさせたらよいのか、頭痛の種です。そんな時お助けマンの登場、それは博物館です。当館では常設展示に、沖縄の歴史・考古、自然史、美術工芸、民俗を、それぞれのテーマで実物資料を展示しております。展示資料を見ながら課題を見つけ、それを調べていくことも可能です。博物館は、イベントのある時だけでなく、日頃から、アミューズメント・スペースとして、興味関心にこたえる場として、また学習の場として気軽に利用していただきたいと思います。



裕子と武子の 会話

博物館は
こんな利用の仕方が
あるかもよ

石野裕子さんと金城武子さんは博物館に非常勤で勤めています。ご両人が日頃感じている博物館について語っていただきました。
　さて、博物館の印象は……？

武子：博物館の楽しみって何でしょう？

裕子：博物館を訪れたいのは、本物があるから……。例えば、今回の展示された仮面の一つ一つからは、そこで生きている人間の神への畏れや娯楽の楽しみなどが感じられます。同様に常設されている品々も芸術として本物であると同様に暮らしを日々営んで人々の思いを伝えうるものとして、本物、であると言えるでしょう。それらに静かに向き合うことで感性のひだが育つと思います。金城さんは……？

武子：私は、知る、楽しみってものがあると思います。見たことのないモノ、今まで自分の世界になかったモノを博物館という空間が教えてくれるんですよね。一目見ただけではなんだか分からないモノについても聞きさえすれば専門の方たちに分かりやすく説明してもらえるし……。

裕子：博物館は一般に利用しづらいようにいわれていますが？

武子：宣伝が足りないんじゃないかと……皆博物館が何をやっているか分からないから興味が湧かないと思うんです。

裕子：館内にある資料の目録が手軽に閲覧できると助かります。外国の方のために英語のキャプションを付けて欲しい。そして各展示室をゆっくり見学できるように長椅子を増やして欲しいです。

武子：博物館は利用する方の意志でいくらでもよい方に変化していくというふうに考えて、博物館に対する要望をどしどし言って頂きたいですね。

裕子：気づき、発見の場である常設展と、内と外へ視野を深めていく特別展の企画で動きのある博物館の利用ができると思います。

　生涯学習時代の叫ばれている昨今、博物館の社会的役割りは益々大きなものになると思います。

　観光客などの一過性の利用のみでなく、人々の生活に意味を持つ、地域に根ざした、参加、する博物館としてのとりくみも必要になると思うね。

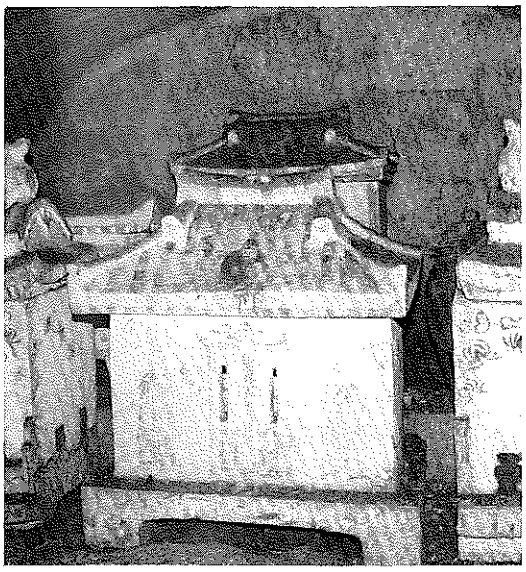
貴重な自筆書

謝花雲石書を寄贈

このたび、神奈川在住の浜元寛得氏（雲石の二男）より、謝花雲石（1883～1975）の作品５点（掛幅装）、手本『書法真決』の中の「點畫起手法」や臨書「六朝墓志銘」「雁塔聖教序」「草書千字文」などの寄贈があり、９月10日には浜元氏を招いて感謝状の贈呈式が行われました。雲石は大正末から昭和にかけて活躍した書家です。1911年朝鮮に渡り、海岡・金圭鎭という書家に師事し、王羲之の書を学んでいます。沖縄にもどってから沖縄の芸術文化の発展に大きく貢献されています。来年度は、今回の寄贈品の公開をきっかけに、雲石の作品と生涯を紹介する展示会を予定しています。

たっぷりと厨子甕10基寄贈

当館には毎年のように厨子甕の寄贈があります。厨子甕を直接当館に持参される方もいますが、多くの場合はこちらから受け取りに行きます。昨年10月末、受け取りに中城村（安里清氏）へ出かけました。なんと、厨子甕の中で一番重い石厨子が10個！男４人がかりでやっとこさ動かせるというシロモノが数個ありました。それを墓の中から出し、さらに道路側まで運んで車に乗せて、館まで運ぶという重労働でした。



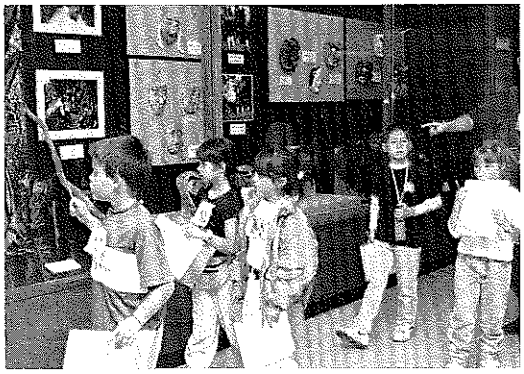
近年、宅地造成、道路拡張等の工事で墓の移転が進み、同時に墓の小型化が進んでいます。また、県外移住するために、先祖代々のお骨を持って行き、墓や厨子甕を処分する例が少なくありません。このような事情等があって、墓室内に永く眠り続けたたくさんの厨子甕が当館や資料館に収蔵されるようになったのです。

特別展

「アジアの祭りと芸能」おわる

91年10月15日から12月1日の期間、特別展「アジアの祭りと芸能～仮面と音楽～」が開催されました。アジア13か国の仮面と楽器を中心に約430点を展示しました。展覧会をより理解していただくために、関連催し物として文化講座（特別講演）・仮面芸能講演会・仮面製作実演会を開催しました。また、午前と午後の1回ずつアジアの芸能のビデオテープの上映会も行ないました。展覧会および関連催し物をとおして、多くの県民が沖縄文化とアジア文化の相違点を理解し、沖縄文化の源流やアジア文化の多様性を考える機会になったのではないかと思います。

展示期間中、約2万7千人の方が来館されました。



展示会のおしらせ

企画展／琉球の香り

あわもりの歴史と文化

会　場：1992年2月4日㈫～2月23日㈰　　会　場：2階企画展示室

沖縄特産の酒「泡盛」は、周辺諸国との長い歴史的交流の中で生まれてきたものです。泡盛は、東恩納寛惇氏がタイの酒「ラオロン」との関連性を指摘されたことや、その醸造技術においては、世界的にも特異な黒こうじ菌による蒸留酒として注目を集めてきました。

本展示会では名酒「泡盛」にスポットをあて、酒・酒造業にまつわる古文書及び絵図資料、伝統的な醸造器具、祭りや日常生活に密着した酒器、県内酒造所の銘柄や写真パネルなどを一堂に展覧紹介します。会場では泡盛に関するビデオの上映、試飲会並びに泡盛の即売コーナーを設けます。この機会に、特産物である泡盛の香りを体験し、沖縄の生活文化に対する理解を深めてみませんか。

知っていますか？

博物館に関する豆知識

Q１．博物館とは？

実物の資料を収蔵し、一般公開を目的に常設の展示施設を備え、公共的運営をしていることの条件を備えている施設のことをいいます。

Q２．博物館と図書館はどう違いますか？

例えば本を扱う場合、図書館は内容が資料で、コピーしても価値は同じです。けれども博物館は内容の他、紙質等からも価値を引き出すため、実物でないと価値は減ります。

Q３．動物園も博物館だろうか？

資料の調査・研究、収集・保管、公開・教育の機能を持っていれば、生物が資料でも博物館です。植物園、水族館やプラネタリウム、美術館も博物館です。

Q４．博物館という語はいつ頃できた？

幕末の海外派遣使節団の報告書に「究理の館」「百物館」等とともに出てくるが、福沢諭吉の『西洋事情』でミュージアムの翻訳語として一般化してきます。

Q５．ミュージアムの語源は？

ギリシア神話の芸術・科学の女神ムーサイ（ミューズ）に捧げる座を意味する「ムセイオン」。

Q６．博物館はいつ頃できた？

古代ギリシア神殿の宝物館など諸説あるが、一般公開施設としては、1683年のイギリス・オックフォド大アシュモレアン博物館が最初です。

Q７．日本最初の博物館は？

1872年（明治５年）、現在の東京国立博物館の前身「文部省博物館」が３月10日から４月末まで開館しました。その後官史の休日の１と６のつく日に開きました。

Q８．登録博物館とはなんだろう？

資料数、学芸員存在、建物と土地の状況、開館日数、公立は教育委員会が所管することなど、博物館法第２章の条件を満たす館。国立、学校附属の博物館は登録外。県内の登録博物館は県立博物館と石垣市立八重山博物館です。

Q９．相当施設とは？

登録対象外の国立、学校附属館と、登録条件は満たさないが、資料数、施設、公開などについて登録条件を緩和した条件なら満たしている「準博物館」。県内では東南植物楽園と沖縄こどもの国。

Q10．類似施設とは？

博物館法対象外（登録博物館、相当施設外）の、その他の博物館。条件は満たしながらあえて申請しない館もある。

（次号につづく）

（伊藤寿朗著・ひらけ博物館より）

(寄 稿)

こんなふうにしたら！ 博物館雑感

石 野 裕 子

1 それぞれの展示室ごとに利用する

＜自然史室では＞ 初めて沖縄に来た人、あるいは自分の住んでいる沖縄を知ろうとしている人のために沖縄の気象や動植物などの分布や特徴的な事柄を分かりやすくグラフや地図で表記できないかと思います。

・鳥の泣き声調べ～この鳴き声はどの鳥？ この鳥はどんな声で鳴くのだろう

・動植物の色調べ～どうしてこの動物（植物）はこんな色をしているのだろう

・比べてみたら～家の周りに住んでいるネコ（ブタ、カエル、サカナなど）と比べて、どこがどう違うか

＜美術工芸室＞ 例えば、私が螺鈿の重箱を見たときに知りたいと思うのは、それができるまでの工程です。材質は何だろう、その木のどの部分を使ったのだろう、どう組み立てたのだろう、釘は使っているのだろうか、漆はどうやってできるのだろう、螺鈿とは具体的にどういう技法なのかな、どういう貝を使ったのだろう、模様には何か決まったパターンがあるのだろうか、全工程を一人でやったのだろうか、寸法は決まっているのだろうか、……などという事です。

ただ展示するだけでなく、なぜ展示してあるのか、分かり易く教えてくれたらいいなと思います。

・どんな材質で染めてあるか～紅型、焼物

・今、皆の着ている服と染めの材料を比べてみよう

・どういう材料で作ってあるか

・どんな模様があるか、写して描いてみよう～植物、動物、幾何学模様など

・どういう人が作ったのか

・どういう人々が使ったのか

＜民俗室では＞

・民俗と工芸の違いって何だ？

・どういう材料で作ってあるんだろう～バーキ、オーダー、ユートゥイなど

・なぜその材料で作ってあるのだろう

・やり方知ってる?～臼は右に回すのかそれとも左に回すのか、瓦の置き方、七つ玉ソロバン……など

・使い易くするためにはどんな工夫がしてあるか

・ウーバーラとユナバーキ、どちらも同じカゴなのにどうして形が違うのかな

・今あるこれは、昔のどれだ?～冷蔵庫とサギジョーキ、水タンクと水道、掃除機とホーチなど

・今のものと昔のもの、長所短所を比べてみよう～ステンレスのカゴとバーキプラスチックの浮きとガラスの浮き、ゴムゾウリとサバ、エンジンの付いた船とサバニ……など

・？00年前の人の朝起きてから夜休むまでの一日を想像して書いてみよう～仕事、食事、買物、着ているもの、交通、一年の儀式、結婚、出産、葬式、病気の時、税金、通信、……など

2 各展示室の相互の関連性に着目する

＜美術工芸＞←→＜自然＞を見る

・美術工芸室の展示品に描かれている動物、植物にはどんなものがあるでしょう～いつ頃咲く花？ 沖縄にも住んでいる？

＜民俗←→美術工芸＞

・美術工芸室にあるやちむんと民俗室にあるやちむんとどこが違うか比べてみよう

・美術工芸室には漆塗りの器がいくつかありますが、民俗室の展示品で漆器のものはどういうものがあるでしょう

＜民俗＞←→＜自然＞←→＜美術工芸＞

・民俗室には貝を使った道具がいくつかありますが、その貝はどういう種類でどんなふうに使われているでしょう。また、美術工芸室に展示されている貝を使ったものにはどんなものがあり、どういう種類の貝が使われているでしょう…

他にもまだまだ博物館を使って発見しながら知ることを楽しむ方法があるはずです。この文を書くにあたって時間と思考力のなさで考える幅が狭くなった事と、加えて工芸、歴史室を見学できなかったためにそこだけ抜け落ちてしまったのが残念です。

「地域に開かれ、地域に還元していく博物館」という言葉をよく耳にしますが利用する側も、場を提供する側も具体的にそれがどういう事なのか、まだ言葉のみの理解に留まっているように思えます。例えば講演会などの企画をしても、記録としていつでも利用できる体裁になければ、時間のある人だけが参加できるイベントとして終わりかねないのではないでしょうか。設備や施設という「器」の部分はいずれ解決する問題です。今、ある施設をどう活用するか、視点を多く持つことで、その幅はぐっと広がると思います。講演会のテープ起こしや、図書の整理と目録の公開、分かりやすく（専門語の説明が少なく、名称だけしか書いていないものがある）読み易い（壁際の説明文は小さすぎて見えない）キャプションの設置、英文のキャプションの設置、図録の充実など手間は掛かりますが、是非とも必要なものだと思います。また、ゆっくり観賞するために各展示室に長椅子を置いて欲しいと思います。正直いって博物館に対する私のイメージは「暗い、広い、浅い」でした。「暗い」と言うのは実際照明が暗かったり建物が古かったりというハードな理由と、職員が暗そうというイメージや、講演会のテーマは面白そうなのもあるけれど、年寄り向きに感じられるというような感覚的な理由とがあります。「何をやっているのか分からない」というところからくる「暗さ」もあるでしょう。「広い、浅い」というのは、展示室は4つの分野を揃えているけれども、こちらの勉強不足のせいですが、なんだか並べてあるものをただボーッと眺めるだけで終わってしまうのです。展示室が手狭なために、一つの分野を系統立てて深く追っていく面白さにやや欠けるような気がします。

私が感じている博物館の印象は、ここで仕事をする中で変わってきた部分もありますし、今の博物館が抱えている問題も、新しい博物館ができて解決できる事が沢山あるでしょう。限られた予算の中で少しでもより充実した博物館にするために、いろんな方が努力していらっしゃるのに触れる事ができたのは幸いでした。現博物館が多少暗かろうと狭かろうと、ちょっとしたアイディアと少しの手間でもっともっと「来やすい、楽しい」博物館になれるはずです。この「手間」を惜しんで欲しくないなーと思います。仕事は去年の12月1日に終わりましたが、今後は、単なる観賞者でなくて「動いて、考える」利用者として博物館と関わってゆきたいです。

—琉球の美を探ろう—①

〈展示解説シリーズ〉

美術工芸室にようこそ

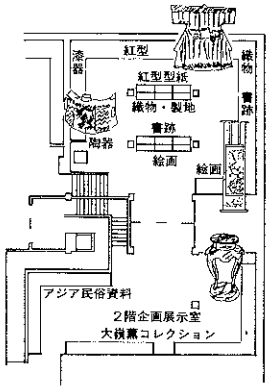
沖縄が琉球王国として栄えた時代に数多くの美術品や工芸品が作られていました。第3室（美術工芸）は，これら美術工芸品が見学できる部屋です。右まわりで絵画、書跡、織物、紅型、漆器、陶器の順に展示してあります。

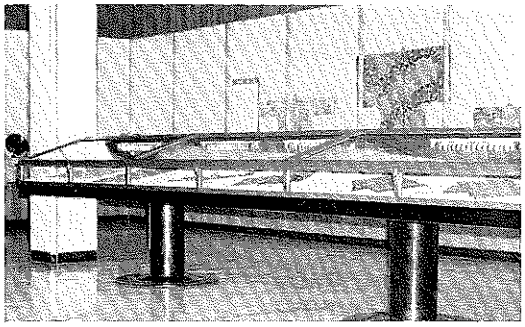
絵画や書跡などの美術品は、おもに中国から絵の描き方や文字の書き方を学びました。ですから絵画や書跡は、中国の影響を大きく受けています。

絵を描く人たちは絵師（現在の画家、あるいはデザイナー）といい、職業のひとつでもありました。絵師は絵のほかにも漆器の図案などもてがけていました。

工芸品は、琉球王国の重要な産業のひとつでした。とくに織物は、王府が図案まで指定し、宮古・八重山地方に発注しました。そして税金のひとつとして王府に納められました。織物は、いろいろな種類の繊維（糸）や、織りかたがあり、階級別に色や、模様などが決められていました。

紅型は、いろいろな模様を布に染めるもので、あざやかな色あいが特徴的で、





日本の友禅染とよく比較されます。おもに上流階級の人たちが着けたもので、女性だけでなく、踊り衣装や男子用のものもあります。

高温多湿な沖縄は、漆器の生産に適した地域といわれています。そのためか漆器の製作はかなり活発に行われました。その中心になったところが、王府内の貝奉行所です。ここで漆器の生産・管理がなされ、中国や日本に輸出されました。絵画のコーナーで紹介した絵師も貝奉行所に所属していました。

陶器は、古我知（現在の名護）、知花（現在の沖縄市）、湧田（現在の那覇市）、宝口（現在の那覇市首里）など各地に窯場がありましたが、1682年に壺屋に統合されました。その後壺屋を中心に焼物が生産されていきます。その他、喜名（現在の読谷村）や宮良（現在の石垣市）にも窯場がありました。

琉球王国時代に発達した美術工芸は、「大交易の時代」から島津氏の侵攻までの歴史やその後の琉球王国の動きと関連します。歴史展示室の近世琉球のコーナーもあわせて見学して下さい。

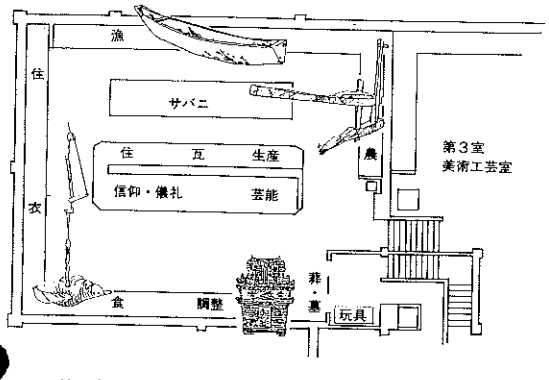
―生活の知恵を知ろう①―

〈展示解説シリーズ〉

民俗展示室へようこそ

民俗室には、数多くの「民具」を展示してあります。民具とは、人々が生活のために作りだし、使ってきたさまざまな道具のことです。民俗室では、民具をとおして人々の生活の知恵や、生活のようすを知ることができます。

〔農業〕畑作と稲作の民具を展示してあります。畑作の農具は木をとがらした掘る串や、鉄をのべたヘラなどの小さな農具がよく使用されました。稲作の農具には、深い水田で使用する木クワや、牛や水牛に引かせて土のかたまりをくだくスキなどがあります。



〔運搬〕沖縄では、男子は天びん棒による運搬が主です。女子は頭上運搬と額からひもによって背負う運搬の２つの方法があります。

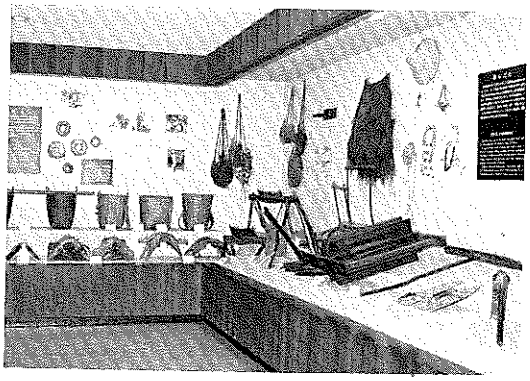
〔漁撈〕沖縄の島々は珊瑚礁の海で囲まれています。珊瑚礁は荒波から島を守る自然の防波堤でもありますが、そればかりではありません。そこにはいろいろな魚や貝などがいて、人々は昔から、それを採って生活をしていました。明治以後は大がかりな追い込み網漁が発達し島々の沿岸を操業して回りました。サバニの発達、水中眼鏡の発明があってできたことです。

〔住〕明治20年頃になって沖縄の民家は大きな変化を生じました。それまでの制限が解かれ農漁村でも赤瓦の家が多くなったのです。屋根には獅子がのせられるようになりました。

〔衣〕農漁村の一般的な衣服としては、夏は芭蕉布の着物、冬は木綿の着物でした。かぶり物では、クバ笠や麦わら笠が主でした。はき物には、アダンの葉やワで作ったぞうり、デイゴの木などで作った下駄がありました。

〔食〕いろいろな食物の加工用具、炊事用具、食器などを展示してあります。

〔信仰〕御嶽には、村を守ってくれる神がまつられています。御嶽に出入りできるのは、ノロやツカサに代表される女性の神職（神女）です。家庭では、仏壇に先祖の位牌をまつり、台所のカマドの後ろには火の神をまつります。死後の世界を飾った厨子甕には、いろいろなタイプがあります。甕型と家型があり、陶製と石製があって沖縄の一大特色をなしています。



博物館に マングローブ林を！

マングローブって知っていますか。

河口付近の砂泥の湿地に生える植物でメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギなどが生育してマングローブ林をつくります。沖縄本島では東村の慶佐次のマングローブ林が有名ですね。

先頃、国場川にもマングローブ林を蘇らせようと一般有志の方々がマングローブを植えましたが、博物館でも大村庶務課長が頑張ってオヒルギの種子を植えたところ見事に発芽し来館者の目を楽しませています。すくすく育って欲しいものですね。

博物館 文化講座のあんない

第209回

中国の古窯を訪ねて

（1月18日(土) 午後2:30～4:30）

講 師：知念　勇

（県教育庁文化課課長補佐）

第210回

泡盛の話

（2月15日(土) 午後2:00～5:00）

講 師：照屋比呂子

（沖縄県工業試験場食品室長）

古酒の研究

講 師：玉城　武

（東京国税局鑑定官）

第211回

歴史の道を歩く

（3月14日(土) 午後2:30～4:30）

講 師：当真嗣一

（沖縄県立博物館教育普及課長）

萩尾俊章

（沖縄県立博物館学芸員）

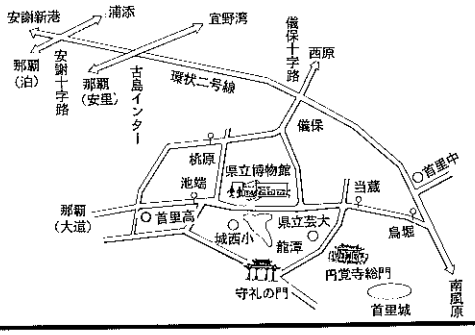
♡ 各講座は当館講堂で行います。
受講は無料です。

平成4年1月1日発行 ㊀903 那覇市首里大中町1－1 ☎(098)884－2243・886－4353

〈バス路線〉

○那覇交通（銀バス）の利用

（那覇市内線）・⑫末吉線 ⑬牧志線 ⑭石嶺線 } 池端又は当蔵下車 徒歩2分

（市　外　線）・㉕石川線 ㉝西原線 ㊼琉大線 } 桃原下車 徒歩5分

○東陽バス　・⑥⑪（浦添市屋富祖←→与那原）
儀保又は鳥堀下車徒歩10分